白い薔薇が咲く頃は

ホットココア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白い薔薇が咲く頃は

【Nコード】
N6826L

【作者名】
ホットココア

【あらすじ】
一国の国の皇女として生まれたコリーン・アリステッド。
両親の愛を受けずに育った彼女は孤独に生きる。

皇帝が亡くなった時，皇妃は国を女帝政に変え，
王子レクシアスを修道院に送り，娘のコリーンを
徹底教育させた。

国民と相容れなかった女帝アリステッドは反感をかい，

革命が勃発する。革命のさい，他国に征服され，
忘れ去られた頃，元女帝アリステッドは子ども達と引き離され，
裁判に引き出され……

彼女に下されたのは……

第一話　回想録

１８５７年　１２月１１日

サーレ公妃の回想～

「私がまだ子どもの時……そう，私が皇女だったとき。

母はとても偉大な方でした。生まれながらに華があり，気品に満ちていて，上品で賢明な方だったのです。

ですが，母は政治には向いていませんでした。
なぜなら，彼女は幼い頃から教育は受けず，ただ隣国に嫁ぐ道具として育てられたのですから。

私の祖母にあたる，元王妃様は，母を娘とも思わず，厳しく育てたそうなんです…。
私に見せる母の笑顔からはとうてい想像できないことでしたが…。

母は運命をいつも呪っていました。
政治の才能がない自分をひどく悔やんでおいででした。

確かに臣下や民達の前では厳格な女帝になり，たしかに物腰良さそうな，正しい政治をするような女性には見えませんでしたが，忙しい中，私と兄を愛し，育ててくれたのです。

母を……あらゆる階級の人々が嫌いました…。
教育不足で何の罪もない母を……。
好かれようとすればするほど嫌われる母の姿は…
幼かった私の心に，深く刻まれていきました…。」

１８６５年　６月１８日発行
『忘れ去られた薔薇の回想』　による

第二話　悪女の娘

コリーン・アリステッドは憂鬱だった。

女帝であり，彼女の母親であるアルセリーナを見ると胸がムカムカし，眩暈が起きるのだった。
アルセリーナはまるで意地の悪い女神のように振る舞い，自覚はないくせに，母親ぶって上から話しかけた。つりあげられた目，さまざまな悪事を犯してきた肉付きの良い腕。

いわゆる「中年太り」の時期であった。
40になっても女帝は美しく，若い頃の輝きは永遠に失われてしまったが，むしろ肥満が彼女の肌にツヤを生み出している。—当たり前だ。コリーンは思った。

少ない国庫を美容で赤字にしてしまった女帝なのだから。

また新しく購入した美容液の匂いをまるで自慢するかのようにプンプンさせながら女帝はまだ少女っぽいコリーン・アリステッドに近づいた。コリーンは立ち止まって母親を見上げた。女帝は話しかけずに彼女の頭の先から足の先まで満足いくまで見つめた。

コリーンは苛立ってきた。

いつまで私の体を見るのかしら。毎日見ているくせに……。
やっと女帝が口を動かした時には，コリーンはそっぽを向いていた。

「お母様を見なさい！コリーン！！

貴女はいずれこの国を継ぐのですよ！そして今日は民に初めて洗練された貴女を見せ付ける日です！
貴女は分かっているのでしょうね？コルッセント公妃に言われませんでしたか？」

コリーンはそれには答えず，ふくれっ面で自分のドレスを指差した。

もちろんそんなことは分かっている。だからこそ今日はちゃんと皇女として正装しているのだ。
わざわざ聞かなくてもよいことを聞かれて，コリーンは余計苛立った。

白い生地に金色の糸でデザインをつくり，その上にボリュームたっぷりのレースをかぶせる。金色のデザインがレースの下にうっすらと映ってとても美しい。まるで甘いケーキのようなふんわりしたドレスは少女なら夢見るものかもしれないが，コリーンは気に入らなかった。

なにせこのドレスは彼女より少し小さいのだ。
コルセットだけでも彼女の腰をきつく締めすぎて，彼女は息切れ寸前だった。

しかしこれは女帝のせいであった。
女帝はいつまでも彼女を幼い子供だと思っている証だった。いずれ自分を抜かすほど美しくなるであろうコリーンを恐れている象徴でもある。すでに13歳のコリーンにはうすうす気付いていた。

女帝は鼻で笑った。

「そうね…でもそのドレス，貴女にはもったいないんではなくて？

少し小さい気もするし……」

ののしっている。女帝の目を見れば一目瞭然だ。コリーンはきっと目を上げて言い返した。

「そのとおりですわ！！アルセリーナ様！このドレス，私にはとても小さいんですの」

女帝は一瞬ひるんだが，不機嫌そうな顔をしてコリーンを睨んだ。そしてくるりと背を向けながら言った。

「なら新しくすれば良いでしょう。お金ならいくらでもあるんですからね」

ええ，借金ならね！！コリーンは去ってゆく母の後姿にこの言葉をぶつけたかった。

すでに国庫が空っぽ寸前であることは知っている。そしてナルセーシュタイン王家には借金がとめどもなくなだれ込んでいるのも知っている。だから彼女は我慢していた。実はずっと前から女帝にドレスが小さいことはいっていたが，女帝は知らぬフリをしていたのだ。

国庫が危機的状況であることを知ったコリーンはそれ以来女帝には何も言わなかった。

今になって私のドレスを小さいだなんて！！

コリーン・アリステッドは自分にお辞儀をしていく貴婦人や宮廷人を無視しながら私室へ戻っていった。

角を曲がる直前だった。その恐ろくて，忌まわしい声が飛び込んできたのは。

角の近くに，グランティィリエ公爵とヘルセル伯爵夫人，ブラッティン公妃が話していたのだ。
影と，そして声を聞けば皇女に分かった。先に言ったのはグランティィリエ公爵だった。
「あの娘……コリーン・アリステッド殿下は…今日の祝祭にでるのかね」
それにヘルセル伯夫人が答えた「ええ。」
「なんでも正装して出席なさるのよ。それもサイズが小さいっていうのにね」
それと同時に笑い声が上がった。コリーンはサイズの合わない自分のドレスを見て赤面した。
そのあと，ブラッティン公妃がクスクス笑いながらイタズラっぽく言った。
「それだけじゃないわ！無様なその小さいドレスのコルセットがきつ過ぎて，民衆の前で気絶するんじゃないかって…それにかけてる人もいるわよ！本当にあたったら５０プリエ（通貨）なんですって」
それにも笑い声が上がった。最悪だ！グランティィリエ公妃は可愛くて愛想がいいので，コリーンのお気に入りだった！コリーンの心はズタズタにされた！そのあと，とどめの一撃が出た。
「あの顔を思い出せよ！美人でたいそう愛らしいが，不機嫌になると母親そっくりになる！
ついでに俺の挨拶も無視！どうせ心も女帝と一緒なんだろう。まさに悪女の娘さ！！」

コリーンは憤激していた。バッと角を出ると，一瞬立ち止まって呆気にとられてこちらを見ている貴人たちをかつてないほど睨み，その青い目に憎しみと恨みと怒りを込めた。

そして貴人達がすくみあがると，彼女は足早にそこをかけてゆく。さきほどは恐ろしく燃えていた目を涙でいっぱいにしながら。

第三話　天使のように

「貴女は天使のようになるのですよ。名だたる王家の娘，次期女帝としてね。
　他に４人もいる皇女の中で貴女はとてもいい席にいるので。他の娘達は近く，隣国の王妃，皇妃として旅立ってゆくのですからね」
皮肉っぽく，アルセリーナが言うとコリーン・アリステッドは返事もしないで頷いた。
頭の中では，ただ“悪女の娘”という言葉が繰り返されるのだ。忌々しい宮廷生活。コリーンは我慢の限界にきていた。女帝の後を継ぐくらいなら，長女になんか生まれなければ良かったのだ。そうすれば，夢のような優しい王子の許へ行くことができるのだから。

「聞こえているんでしょうね？この群衆の声が。
皆貴女を必要としているのよ。偉大なる私の娘として」
“悪女の娘”として！コリーンは眉をひそめながら心の中で呟いた。窓の外には，国庫が空なのを知らされず、強大国として成長すると信じきっている我が国の民が集まっている。洗練された私を見ようとして！
無理矢理にも期待をかけようと………！！

「では行きなさい。これが成功すれば王家のイメージアップにも繋がりますからね」
コリーンはそれを完全無視すると，従僕によって開け放たれた窓を抜け、テラスに出た。
一斉にどよめきが起こった。進み出てくる皇女の神々しい姿に，民

衆は呆然とした。
純白のドレスに身を包んだ皇女は幼い女神ともいえる風格を表していた。
清楚で整った顔，こぢんまりとした形の良い鼻，つぶらだが大きな光を放つセルリアン・ブルーの目。まるで陶器の人形のように白い肌に，血のような赤い小さな唇。そして豊かな銀色の，美しくウエーヴした髪。皇女は群衆に向かって精一杯微笑んだ。
すると次々にバンザイの声が上がり，耳をつんざくほどの盛大な拍手が沸き起こった。

「皇女様バンザイ！」の上がった。
「なんてお可愛らしいんでしょう！！」
「なんとチャーミングな！！！！」
「素晴らしい皇女様だ！」

群衆の歓びと彼女への信仰は絶頂に達していた。だが，熱中する群衆を見て，コリーンの脳裏を不安が横切った。
もし私が女帝になったとき，私が母のように悪政を行ってしまったら，民衆はどう思うだろう？
やはり前女帝と同じような低レベルな女帝としてとらえるのだろうか？

そうなってしまったらどれほど民衆は私を憎むだろう……。

コリーンはどよめきと拍手を聞きながら，そんな思いにかられた。
チラリとうしろを振り向くと，アルセリーナが目を光らせているので，コリーンは慌てて民衆に振り替えり，お礼の言葉を述べた。

「親愛なる我が国の民よ。私は次期女帝コリーン・アリステッド・リュ・ナルセーシュタインです。女帝アルセリーナの長女です」

民衆は期待に溢れる視線を彼女に向けていた。今この瞬間，地球上で彼女ほど注目され，期待された人物はいなかったであろう。彼女は続けた。

「私は今１３歳です。まだほんの子ども……。教育も十分ではありません。ですが他国との戦争による飢饉や税に苦しむ貴方がたのお気持ちは熟知しています。だからこそ，私が女帝になったとき，母と同じように貴方がたに尽くすつもりでいます」

コリーンは前民衆にゆっくりと視線をまわした。

「それまで…しばしの間，期待していてください。そして忘れないで下さい。私はどんなときも，貴方がたのことを考え，貴方がたの幸せを祈り，国の繁栄を祈っていることを」

群衆は大人満ちたコリーンの態度と言葉に圧倒されていた。誰もが言葉を失い，彼女の利口さに息をするのを忘れているほどだった。

「ナルセーシュタイン家万歳！！！」「女帝万歳！！！」「天使のような皇女様万歳！」

それぞれが彼女を称えた。それぞれが，さまざまな思いを胸に。今や彼女は幸せをもたらす一人の天使であった。彼女の自信に満ちた笑顔の裏には，恐れと不安が重くたちこめていることには誰一人

として気付いてはないのだが。

第四話　隠された弟

“元気かしら。もうずっと会っていないわ”

コリーンは走りながら心配になってきた。片手には紙袋に入った少量のお菓子を，そしてもう片方には白い薔薇の入った花瓶をもって。

真昼だった。やっとイジワルな母の担当する勉強を終え，自由時間になると，彼女はある塔にまっしぐらに走っていった。彼女はあせっていた。どうか元気なように。寂しくて病気になっていませんように。

コリーンは昼間でも薄暗い螺旋階段を上りながら一心に祈った。そして鉄の扉の前に立つと，もっていた金色の鍵で扉を開けた。

―ガタンという鈍い音がして，扉は内側に開いた。

中で，ベッドにすわっていたのは，ブロンドの髪とコリーンと同じ，セルリアン・ブルーの目をした愛らしい少年であった。彼はもう１２歳であったが，どうみても９歳か１０歳くらいにしか見えなかった。

コリーンは息を整えながら，少年を見ると，ホッとしたようにその場にすわりこんだ。

「コリンヌ……！！」

彼はそう呼びながら足をひきずって，彼女に駆け寄った。彼女がそれを制した。

「大丈夫よ……はやくおもどりなさい」

少年はつぶらな瞳をパッチリしながら，心配そうにコリーンを見つめ，おずおずと薄っぺらなシーツをはった固そうなベッドにもぐりこんだ。コリーンは上品に立つと，さっそく少年に持ってきたお菓子を渡してやった。

少年は細い目を思い切り大きく開いて喜んだ。

そして夢中でお菓子を食べ始めた。コリーンは食べている少年の横で，白い薔薇の花を，唯一光がさす窓のところへ置いてやった。

少年は薔薇に気付くと，微笑を浮かべた。

「また持って来てくれたんだね…。いつも有難う…」

コリーンは得意げに付け加えた。

「貴方が白い薔薇がスキって言うからね…。前まで届けていた紅い薔薇や，黄色い薔薇はやめたの。

白っていいわね。まさに無垢そのもので……」

少年は黙って微笑んだが，またお菓子を食べ始めた。

コリーンはやせ細って蒼白な彼の顔を見つめながら，涙と，そして怒りがこみ上げてきた。

「レクシアス……貴方は…自分の母親を恨まないの……？」

レクシアスと呼ばれた少年はふと顔を上げた。

「何故？」

コリーンはそれには答えず，黙りながら俯いた。

彼は知らないのだ。自分が私の妹，皇太子で本当は皇帝になるはずだったということを。

なのに母がそれを捻じ曲げて女帝制に変えてしまった。それと同時に彼の境涯も一変し，

あたかも忘れ去られたようにこんな塔に一人ぼっちで閉じ込められている……。

私と同じ，ナルセーシュタイン家の息子なのに……。

コリーンは今になって深い罪悪感を感じていた。

彼には話した方が良かったのだ。貴方が皇太子で，次期皇帝だったはずなのだと。私はただの皇女なのだと。それをアルセリーナが変えてしまって，貴方は一生孤児として暮らすはめになったのだと。

あとになって苦しむのは彼なのだ。だが，すでに病気におかされている彼にそんなことが言えようか。

いつか自分の母に会うのが夢だというのに。彼は目を輝かせて語るのに。

コリーンは嘘の微笑でそれをきくが，心はしずんでいた。

そして自分のせいでこうなってしまった彼が可哀想でならなかった。

レクシアスは小さな窓の外に広がる透き通るような青空を見つめながら，呟いた。

「僕が……元気になって，ここを出られるようになった時……コリ

ンヌ，僕は一番最初に何をすると思う……」

コリーンは彼のために温かい靴下を縫ってやりながら，微笑んだ「さあ，何かしらね？」

レクシアスはゆっくりと振り返って，彼女に笑い返した。

「それはね……母さんを見つけることなんだ……。母さんはきっと理由があって，僕を手放したんだろうし，いつか必ず僕を泣きながら抱きしめてくれるんだ……」

コリーンは笑みを消して，即座に俯いた。

が，すぐに泣きそうになるのをこらえながら，レクシアスの手をにぎりながら祈るように言った。

彼女は真剣だった。

「ああ…レクシアス……お母様はずっと以前に遠い国へいってらっしゃるのよ。貴方はきっと会えないわ…。だから…私が貴方のお母様になるわ……精一杯優しくするから…」

レクシアスは微笑んだが，すぐに首を振った。

そして，すまなさそうにコリーンの目を見つめた。

「ごめんよ……。

いつもコリンヌには迷惑をかけてきた…だが結構だよ…僕は知っているんだ。この前誰かが話しているのをきいたよ。君がこの国の皇女だってこと…。何故そんなに僕に尽くしてくれるんだい？ただの好意とは思えないんだ。君と僕は何らかの繋がりがあるとしか……」

コリーンは彼を抱きしめた。彼が呼吸困難になるくらい抱きしめて，

それからコリーンは彼の額にキスをしながら涙目で呟いた。
「やめて，レクシアス。私と貴方にたとえ繋がりがあったとしても，私は貴方への好意で来ているの。愛しているわ。本当よ。だから，私を…母親だと思ってちょうだい」
彼はコリーンを引き離して，やはり首を振った。
「だめだよ。君は僕に構うほどひまじゃないだろう。いくら僕が病弱だろうと，僕には分かる。君は僕のために無理しているんだ。君には君の居場所があるし，僕にもきっと帰る家はある。母さんは死んだわけじゃないんだ。僕は信じているんだから。巡り合うことを……」
コリーンは悲しみに暮れて，彼を見つめた。だが，涙で彼の表情は分からなかった。
二人を包む，沈黙。そしてレクシアスはそっとすすり泣く彼女を抱擁した。
「君は嘘をつくのがヘタだね……。僕にはすぐに分かる。君は少しやすまないと…」
コリーンは立ち上がって，手の甲で涙を拭いながら叫んだ。
「私はどうなったっていいのよ！！レクシアス，貴方が幸せならば貴方の微笑みが見たいから，どんな苦痛も耐えてきた……！！！！」
レクシアスは呆然とコリーン・アリステッドを見た。
コリーンは静かに彼に向き直ると，やはり微笑を浮かべて約束した。

「また来るわね……。たくさんの…お土産をもってくるから…」

それ以上，彼女は言わず，クルリと彼に背を向けて出て行った。最後に彼にキスを投げて。

レクシアスは思わず涙を溢した。そして何も知らず，何もできない自分が恨めしくてならないのだった。

第五話　初めての城下街

ある日，コリーンはレクシアスをこっそり城下街に連れ出すことにした。
外出を禁じられているレクシアスは，生まれて初めて知る外の世界に，喜びが隠せなかった。

当日の昼，コリーンは質素だが気品のある白いワンピースをきて，レースのショールを羽織って，彼の待つ塔へ向かった。レクシアスは彼女を見ると，嬉しそうに目を輝かせた。

コリーンのしつらえた新しい服に身を包み，彼女に支えられながらレクシアスは螺旋階段をゆっくりと下りていった。そして重い鉄の扉を開けたとき，彼は外の景色に魅了された。

髪を揺らし，頬を冷たい風がなでてくれた時の気持ちのよさは例えようもなく，柔らかい大地を彼はしっかりと踏んだ。呆然とする彼を，コリーンは急かして歩かせた。

閉じ込められていた森を抜けると，一気に活気に満ちた城下街へと，彼らは溶け込んでいった。

皇帝の像が建つ広場を歩く若い二人は本当に美しかった。
肩までのびるブロンドの光り輝く頭髪を揺らしながら，つぶらで潤んだセルリアン・ブルーの瞳をもつ美少年と，貴族がもつような珍しい銀髪が豊かな，そして少年と同じセルリアン・ブルーの瞳を輝かせる美少女の二人。街行く人々は，もの珍しげに，そして羨ましそうに二人を見つめた。

「二人とも，どこの子かい？」

花屋のおばさんは気品に満ちた二人に声をかけた。

コリーンは上品にお辞儀をして微笑んだ。

「ただのお役人の子ですわ…。今日は気分転換に街に来ているんです」

おばさんは二人をじっくりと見つめた。

「そうかい。それにしては気品があるね！高貴な顔してるよ。お役人にはもったいないね！」

少年は照れて笑った。コリーンは白い薔薇を見つめながら，目を輝かせた。

「おば様…！この薔薇頂けるかしら。１０本でいいわ」

「美しいお二人さんには5本おまけしようかね」

「有難う！おば様！！」

二人は１5本の白い薔薇を受け取ると，気前よく金をはらって，また歩き出した。

レクシアスは楽しそうなコリーンに目を向けた。

「コリンヌ…女帝さまに見つかりやしないかい？」

コリーンは首をふった。

「いいえ！！その心配はいらないわ。母様は隣国へ出掛けているのよ。領土問題のことだから，当分返ってこないわ！」

レクシアスは安心したように胸を撫で下ろすと，コリーンの頬にキスをした。

コリーンはたちまち真っ赤になって，頬に手をあてながら彼を穴があくほど見つめた。

「コリンヌ。今日の君は素敵だ。ドレスを着ているより何倍もね！僕みたいなヤツとは釣り合わないな！！」

コリーンは大笑いした。

「そんなことないわよ！！私だって貴方にはかなわないわ。その瞳とブロンドを見ていると，気絶しそうよ。レクシアス」

レクシアスは静かに微笑むと，黙って彼女の手をひいた。

第六話　芽生えたモノ

「僕があの狭い塔に閉じ込められていた時，いつか君をつれていきたいと思っていた場所があったんだ」

手をひく少年の横顔は普段１０歳位にしか見えないのに，今日だけは違って見えた。

コリーンと同じくらい，いや，それを少し上回るほどに大人っぽく見えたのだった。コリーンは感じたことのない気持ちに胸がドキドキした。

少年が立ち止まったのは，夕焼けの空の下に広がる，カスティーノ海だった。

カスティーノ海は首都カッセントリノの宮殿からも見える絶景として知られている海だった。

コリーンはその絶妙な美しさに心が奪われ，同時に夕焼けの光に照らされる，美しいレクシアスにも魅了された。コリーンはやがて海ではなくレクシアスを見ていた。

「レクシアス……」

「なんだい？」と聞き返す彼は海をじっと見据えたまま，ゆっくりとコリーンを見た。

コリーンは彼しか目に入らなかった。彼はギリシア神話のアポロンのような一つの彫刻だった。

「貴方……塔にいるときとは別人だわ…。まるで私より年上みたいよ」

レクシアスは微笑んだ。そしてコリーンの髪に触れた。
「君もだよ……コリーン・アリステッド……いつもは姉さんのように見えるのに，今日は妹…いや…………」
コリーンは先をうながした「なあに……？」
レクシアスは首を振った。そしてまた少年の顔つきにもどって言った。
「なんでもないさ…可愛い妹みたいだよ」
海のざわめきが遠くなった。コリーンは妹と聞いて何故かがっかりして，またホッとした。
レクシアスの彼女の手をにぎる力が強くなった。
「いつか……僕が大人になって，あの塔をでたとき，今の僕の夢は変わっているかもね。母さんでない，他の女性を求めるかもしれない……」
コリーンはハッとしたが，それ以上何も言わなかった。
レクシアスはそれだけ言うと，かすかに笑って彼女の手をひいた。
もどる場所は，あの塔へ……。
森の手前で，レクシアスはコリーンに微笑んだ。
「今日はおもしろかったよ。また二人で行けたら良いね」
コリーンは虚ろな目で彼を見ていた。私は宮殿に戻らなければいけない。この思いが彼女に重くのしかかる。

「また行きましょう。けれど，もう少し大人になってから。そうしたら，母様から少しは自由になれるから……」

レクシアスは黙って頷いた。そしてにぎっていた手を離し，森に入っていった。

コリーンはじっとその背中を見つめていた。この思いはなんなんだろう。この切ないような，寂しい思いは……。

コリーンは，この謎めいた思いにひどく不安を感じて，それを振り切るかのように走って城に帰った。

第七話　強大国の王子

時は過ぎた。
コリーン・アリステッドは１５歳を目前にし，レクシアスも１４歳となった。
だが，コリーンには一つ，厄介な出来事があった。

—“婚約”である。

コリーンのクリスタリア国ともあろう強大国が，婚約となると世界中の国々が飛びつくであろう。敵国でさえも，クリスタリアの皇女と結婚するのならば，あっという間に和平が結ばれるはず。特に女帝であるアルセリーナははりきっていた。

「数え切れぬほどの求婚者の中で，貴女にピッタリの王子を見つけたのよ」

女帝は満面の笑みでコリーンを見た。コリーンは憤激していた。
—結婚！！どこともしらぬ国の王子となどもってのほか！！！
コリーンの怒りに燃えた目を見れば誰でも彼女の心情が一目瞭然であった。アルセリーナは怪訝そうにコリーンを見つめる。

「何が不服だというの？貴女が不満になるだろうと思って，多大な影響力と莫大な富をもち，最高の軍事国家として有名なペスタリカの，絶世の美男子だといわれている王子を選んだのよ！クリスタリアにとってこれほど有利な婚約はないわ。さあ，明日には王子はつくだろうから準備をなさい」

コリーンはこぶしを握りながら女帝の部屋を荒々しく出た。
何一つ気に入らない！！なぜ私に相談一つしないで勝手に婚約をすすめてしまうのかしら！
コリーンは思い思いをものにぶつけて私室にもどった。

そして口をとがらせながら大きな鏡を覗き込む。
銀髪の量はたくさん増え，肌も陶器のように真っ白。背もちょうどいいくらいに伸びたし，体つきも女らしくなった。頬の紅潮はまだ子どもっぽかった。

だがいくら15だろうと，私は子どもに過ぎないわ！！
コリーンはベッドでうつぶせになって嘆いた。どうせこうなることはわかっていた。
自分の人生は自分では切り開けないのだ。所詮母の手によって，私の人生は決められてしまう。
即位しても，私は母が死ぬまで，お飾りの女帝として過ごすしかないだろう。
引退してからも母は権力をにぎって離さないはずだ。それが悔しくてならなかった。

何より，コリーンはレクシアスを愛していた。
初めは，姉として，兄弟愛として彼が好きで，好意をもっていたが大人となりはじめた彼女は，いつのまにかたくましくなったレクシアスに愛が芽生えていた。

許されないことだとは知っている。どこの世界でも犯してはならない罪だった。
だがもう遅かった。彼女は彼が好きでたまらなくて，1日会えないだけでも辛くて仕方がなかった。
しかし，レクシアスの気持ちは未だに分からなかった。

コリーンはそれが辛かった。彼が自分のことをどう思っているか，まったく分からないのだ。
それどころか，恥ずかしくて彼の顔を見ることもできず，ずっと黙ったままで結局塔を去ってしまうのだ。

「レクシアス……私…耐えられないわ……」

コリーンはすすり泣きながら，レクシアスの名をひたすら呼んだ。
彼に届けばいいと，虚しい祈りを重ねながら……。

＊　　＊

「皇女様，アンドレイ様のお美しさといったら何にも例えられませんわ」
うっとりとした目で，ブランカ公妃はコリーンに囁いた。コリーンは不機嫌そうに頷いただけだった。公妃はとたんに悲しそうな顔をした。

「ダメですわ…。皇女様，もっと喜ばれないと。他国の皇女，王女達がアンドレイ王子を望んでいると有名ですのに……！！女官達は切なくて，ため息をついてしまうとか」

コリーンは黙ったまま座っていた。おしゃべりな公妃はそれ以上何もいわず，彼女の隣に立っていた。

皇女と強大国の王子の初の対面式……。国中はその話で持ちきりだった。

美しい皇女とハンサムな王子！それだけでロマンティックなのに，絶大な富をもった二人となると，世界中にセンセーショナルを巻き起こすのではないか。民衆は口々にそう言った。

だがただ一人，不満な人物がいた。そう。主役であるコリーン・アリステッド皇女であった。

皇女はふくれっつらで豪華な玉座にすわっていた。アルセリーナのはからいである。

その時。ラッパが鳴り響いた。コリーンはそっと顔を上げた。

第八話　政略の対面

馬車から優雅に降りたったのは，世にもまれな美青年だった。

珍しく，ツヤのある黒髪。エメラルドグリーンに輝く，女性なら誰でも吸い込まれそうになりそうな，その瞳。背も高く，素晴らしいスタイルだ。女官や，貴婦人たちは王子が前を通ると，うっとりとため息をついた。

あの気まずいコリーンの家庭教師，ロシュフロー伯爵夫人も珍しく，おだやかな顔つきになった。

もちろんブランカ公妃はむすっとしているコリーンの横でまるで遠い存在のように彼を眺めていた。（実際はそうだが）コリーンは横目で王子をチラリと見ただけだった。

王子のすぐ後に，大使が現れた。大使も物腰の良さそうな公爵という感じであった。

王子と大使は数人の取りまきを連れて，玉座に座っているコリーン，そして宮廷一の実力者カステーイール公爵のとなりの威厳をかもしだす，アルセリーナ女帝の前へ出た。アルセリーナは愛想よく微笑んだが，コリーンはまるで彼らを見ていなかった。

王子―アンドレイ―はアルセリーナの歓迎の言葉を聞きながら，じっとコリーンを見つめていた。

コリーンはブランカ公妃に注意されて，ペスタリカの一行を眺めていたが，彼女が見ているのはダンディなかなかの大使である，カッセリア公爵を見ていた。だが，アンドレイはそんなことはどうでもよかった。コリーンの美貌に，すっかり心が奪われていたのだ。

「歓迎のお言葉を，有難うございます。我が国の誇る王子も，新女帝の良き夫となりこの国を殿下とともに治めていきたいと，思ったしだいでございます…。ペスタリカ国王ハトルスア１３世も，このたびの婚約をとてもお喜びになられています」

アルセリーナはチラチラとアンドレイを見ながら，顔を朱に染めてそれに答えた。

コリーンは余計苛立った。まるで女帝は娼婦だ。若くて，ハンサムな男だったら，誰かれかまわず飛びついていく。そんなところも，コリーンは大キライだった。

アンドレイは一歩前に進み出て，

「ペスタリカ国王子，アンドレイ・コルヤ・フォン・ハトルスワフです。

この国の偉大さを，幼い頃から知らされていました。私の求婚を，アルセリーナ陛下が快く承知してくださり，光栄です。必ず陛下と殿下のお役に立ちたいと思っています」

アルセリーナは満足そうに頷くと，私を見た。その目は多くのことを語っていた。

コリーンはため息をついて，アンドレイを見た。アンドレイは期待に満ちた目で彼女を見つめていた。

第九話　皇女の翼

一体いくつになれば自分の思い通りになるのだろうと，コリーンは苛立っていた。

この前の対面式も自分以外の王族は満足し，宮廷の女達には嫉妬された。全く，コリーンにとっては有害無益な結婚なのである。次期女帝といえども，他の可憐な皇女たちのように政略結婚の駒の一つに過ぎないのははたから分かっていた。コリーンは一種の欲求不満を感じていた。そんな時には，こっそりと5歳になったばかりの妹，ナターリアをつれてレクシアスの塔へ行くのだった。

ナターリア・アリステリア（皇女にはテリアがつき，次期女帝はテッドがつく習わしだった）はコリーンとレクシアスのお気に入りだった。無邪気なナターリアはいつもコリーンとレクシアスを癒してくれた。

ナターリアとレクシアスは自分達が兄弟だとは知らなかったが，兄弟以上に仲が良かった。
幼いナターリアはよく質問した。「レックス（彼女はこう呼んだ）はこの塔から出ないの？」
そのたびに，コリーンは俯いたがレクシアスは少し困ったように微笑んだ。

「僕は，君みたいに翼をもっていないんだよ。ナターリア」
ナターリアは自分の背中を見た。そして首をかしげて言った。
「あたしには翼なんてないわ」レクシアスは眩しそうに窓から空を

見上げた。
「人は皆，見えない翼をもっているんだよ。ただ，この広い空を飛ぶことは出来ないけどね。
けれど，その翼を失うと人は外へ出られなくなってしまうんだ。僕はその翼を小さい頃，永遠に失くしてしまった」
そして寂しそうに，ナターリアを抱きしめた。コリーンは微笑ましそうにそれを見守っていた。
「君が僕の妹だったらすごく良いなと思ったよ。ナターリア。君は僕の天使なんだ」
ナターリアは不満げに口をとがらせた。
「翼があるからだわ！！それならコリーンだって天使なのよ！」
レクシアスはナターリアを離して，コリーンに向かって笑った。
「この天使はいつも僕を手こずらせるな！君は特別なのさ，ナターリア。本当だよ」
“特別”と聞くと，ナターリアは機嫌をなおして，それからずっーとレクシアスに向かってぺっちゃくってていた。二人は本当に微笑ましかった。コリーンは相変わらず，白い薔薇を窓に飾ってから，ナターリアの頬にキスをした。
「貴女にはこの白い薔薇のようにいつまでもいてほしいわ。お母様のように，私のようになってはだめよ」

ナターリアはアルセリーナが嫌いだった。そしていつもコリーンに愚痴っては泣いていたのだ。母の名がでると少し不機嫌そうに聞いたが，愛する姉のようになってはいけないと聞いて，驚きながらコリーンを見つめた。

「なんで？どうしてコリーンみたいになっちゃだめなの？？」

コリーンは何も言わなかった。ナターリアに返したのは微笑みだけだった。そして背を向けてしまった。レクシアスはコリーンを一瞬見たが，すぐに笑いながらナターリアを抱き上げた。

「さあ，帰ろう。おチビさん。コリーンは疲れてるみたいだからね。きっと他のお姉さん達もまってるだろ」

ナターリアは素直に頷くと，コリーンの手に連れられながら「バイバイ」とレクシアスに手を振った。

レクシアスも振り返した。コリーンは振り向かなかった。

帰り道，ナターリアは黙っているコリーンにたずねた。

「どうして，コリーンはレックスに冷たいの？」

コリーンはハッと顔を赤らめた。

「……そうかしら？私が？」ナターリアは頷いた。コリーンは慌てて言い返した。

「…きっとナターリアにはそう見えるのね。でも大丈夫よ。別に普通。心配しなくていいんだから」

城の裏口にくると，コリーンはナターリアに言った。

「レクシアスのところへ行ったことは，いつもだけど，お母様や姉妹に言っちゃダメよ。言うと，レクシアスから聞かされた，貴女の大事な翼を悪魔にもっていかれてしまうからね」

ナターリアはすくみあがって，しきりに頷いた。コリーンは少し言い過ぎたかなぁとは感じながら，ナターリアを抱きしめ，そして別々に城に入った。

入りながら，コリーンは自分の翼が無くなりかけているのを悟った。

第十話　王子の決意

王子がやってきてから2か月が過ぎた。コリーンは変わらず，アンドレイにはあまりしゃべりかけなかった。

ある日，アンドレイは黄金の間を歩くコリーンを捕まえた。コリーンは腕をつかまれ，驚いてアンドレイを見た。

「何をするのですか？私に何か用が………」

アンドレイは顔を紅く染めた。

「用がなくちゃダメかい？そうでなくても，君はいつも僕をけなすじゃないか」

アンドレイは確かに素晴らしい王子だった。剣の技術だったら，彼にかなう者はクリステリアにはいなかっただろう。性格もそこそこ，女性を扱う心得にはとても長けていた。

「けなしてはいませんわ。ただ，いつも宮廷の女性と歩いている姿を見ると，話しかけにくいのですもの」

アンドレイは周りを見ながら，疲れたように言った。

「好きで歩いてるわけじゃないんだよ。コリーン。彼女達が目をキラキラさせながら僕を誘惑するんだ」

コリーンはそっけなく振舞う。

「誘惑される貴方が悪いんです。少なくとも，私の前では遊びを差し控える技術をもってほしいものですわね」

アンドレイは黙ったまま，コリーンの腕を引いた。そしてつかつかと歩きながら，

「君のその言い方をどうにかしてくれないか。そう言われてると，胸が悪くなるよ。

　君は素晴らしい女性だよ。だけど，僕をなぜか受け入れてくれないんだ」

コリーンは怒りが隠せなかった。なんてあまっちょろい男なんだろう。そのルックスだから仕方がないかもしれないが，彼は何もしなくても，女性はやってきてくれると思っているのだ。

連れてこられたのは，中庭だった。いつもは人々が和んでいるのに，今日に限って人はいなかった。

アンドレイは真剣に彼女を見つめた。彼らの耳に入ってくるものは，噴水の音だけだった。

「なあ，コリーン。敬語をやめてくれよ。僕は君と親しくなりたいと思ってる。それが僕の使命だからさ。なのに，君は使命を感じながらも，わざと僕を避けている。違うかい？」

コリーンは何も言わなかった。そしてただ下を向いていた。

アンドレイが悲しそうな顔をした。長い沈黙の末，コリーンはやっと口をあけた。

「そうよ。当っているわ。プリンス・アンドレイ。貴方は確かに素晴らしい男性だとは思うけど，私の知っている男性にはかなわないの

よ。ごめんなさい……やがて妻になる私の言葉には相応しくないのは知っているわ。けれど，貴方が真実を知りたいようだから……」

アンドレイは黙った。そして分かっていたように首を力なく振った。

「やっぱりか……そんな気がしていた。けれど，僕は……」

そしていきなりコリーンを抱きしめた。

「理想の男がいる君を抱きしめるのはいけないと思う……けれど，君が好きなんだ！！

一目見たときから，僕の心は決まっていた。君を離したくない！君が僕から離れていくのを指をしゃぶって見つめているほど，僕はバカじゃない！」

コリーンは一瞬，アンドレイを哀れに思ったが，すぐに彼を突き放した。

「やめて！貴方のその女に対する媚びようは本当にイヤなのよ！本当に私が好きなら，いますぐ気に入りの女達を捨てることね！そして私の心をつかめるように魅力的に過ごせばよいのだわ！」

アンドレイはショックをうけて蒼白になった。コリーンをそんな彼を無視して帰ろうとした。

その時，アンドレイは叫んだ。

「君がなんといおうと，僕は君を愛している！だからこそ，君の中からその男を追い出して見せるさ！今に君は僕のことしか考えられなくなるさ！」

コリーンはその挑戦状には答えず，ただ歩いた。そして溢れ出るレクシアスへの思いをおさえつづけた。

第十一話　燃え上がる心

コリーンへのアンドレイの愛の挑戦状は，瞬く間に宮廷に広がっていった。あいにく，その場面を見ていた人物が，少なからずいたようである。おかげで，コリーンは宮廷の貴婦人たちの反感をかった。コリーンが歩くと，今までは恭しく礼儀をし，愛想笑いをしていた者たちが，コリーンを無視するようになり始めたのだった。

最初は怒りで爆発していたコリーンも，一斉に宮廷の女達に無視されると何も言えなくなってしまって，私室にこもるか，ナターリアとともにレクシアスのところへと向かうようになった。

そして彼女は一段と外部の宮廷人達に対して，陰険になっていった。セルリアン・ブルーの瞳はそそくさと避けてくる貴婦人達を憎悪に燃えて睨みつけた。もちろん，アンドレイへの態度も日増しにそっけなくなってしまった。アンドレイは本当に気に入った娘達を捨てることはしなかったのだ。反面，彼女は急に大人らしくなった。背も伸び，体は丸みをおびて，歩き方が優雅になった。男達は彼女が通ると，思わず振り向いてしまうようになった。このことに，また年をとった女帝アルセリーナは少し不満だったようで，コリーンにいっそう冷たくなった。

コリーンは疲れていた。彼女はそろそろ１６歳になろうとしていた。宮廷人と母の我が儘と，くだらない些細ないやがらせにストレスを感じて，髪の毛が心なしか，うすくなっていた。レクシアスはそれを見逃しはしなかった。

「コリーン…。お節介かもしれないが，君は休んだ方がいいよ。やつれた君を見るのはいやだ」

コリーンは力なく微笑んだ。

「ごめんなさい……。けれど私は休めないのよ。一刻も早くこの国を治められるようにならなければならないの…」

レクシアスはふいにベッドから起きて，たくましい腕で彼女を抱きしめた。コリーンは抵抗せずに彼に任せた。アンドレイとは違う，温かくて，幸せな気分になれるその光の中で，レクシアスへの恋心はいっそう強く燃え盛った。それと同時に，コリーンはレクシアスの中で燃え盛る何かも感じ，彼の熱い鼓動しか耳に入らなかった。

ナターリアは彼のベッドで寝ていた。レクシアスは目をつむったまま，話した。

「やっと二人になれたね。おチビさんがいると君と話す余裕を与えてくれないからね…。

あの子は可愛いよ。だが，君は違う。前は可愛いと思ったことがあったよ…けれど，今は—」

コリーンは彼の腕の中でゆっくりと彼を見上げた。レクシアスはそれ以上何もいわず，ただじっとしていた。人に愛されることがこんなにも幸せだと知ったコリーンの心は溢れ出る思いに耐えられなかった。

「貴方がとても美しく見えるわ…レクシアス…。私より年上みたい……いつのまに，貴方はそんなになってしまったの…」

レクシアスがイタズラっぽく微笑む。

「君だってそうだよ。いつのまに君はそんなに綺麗になっていたんだい？僕は君を見るたび，壊れてしまいそうだった…」

罪に手をそめてはいけない…。

うことはきっとない。二人だけの幸せは見つからない。許されない

ーンは哀れにも胸がつぶれるような願いをもった。けれどそれが叶

人でこの国を抜け出して，どこか幸せな国を探したかった，とコリ

もし貴方に翼があって，私にも弱々しくない，美しい翼があれば二

それは私も同じ。コリーンは心の中で叫んだ。

レクシアスはハッとしてコリーンを離した。コリーンは胸が痛くて仕方がなかった。

レクシアスを見上げることができなかった。まぶたが熱かった。

「コリーン。忘れないで。僕はいつだって君のことを想ってる。たとえどんなに離れていても，僕達はいつか自由のもとで，再び巡り逢えるんだよ。今は一緒にいられても，きっと僕等は引き離される時がくるだろう。だけど，僕の気持ちは変わらないから。君のお母さんはこの関係を知ったら，激怒するだろう。だから，これからはあまり来ないようにするんだ。許してくれ，これは君のためでもあるのだから」

コリーンは溢れる涙を手の甲で拭きながら，頷いた。

そして眠そうに目をこするナターリアを連れて，塔を出た。外は夕焼けだった。

温かい恋の日差しの中で，この日，確かに私達は思いを交えた。怖いものは，恐れるものはもうなかった。

第十二話　虚ろな瞳

「ねぇ……ねぇってば……コリーン…！！」

コリーンは黙ったまま窓から，雪の舞う城下街を見下ろしていた。静寂の中を降り注ぐ白い結晶は，現れたかと思うと，はたと消えてしまった。

コリーンはそれに何か近いものを感じて，思わずため息をついた。

「コリーン！！」

ナターリアがドレスを引っ張った。
コリーンは力なく振り返った。「どうしたの…？」
ナターリアはぶすっとふくれた顔をして，コリーンを見上げた。

「レックスが………」

コリーンはその名をきくと，俯いて黙った。ふいに彼の微笑が脳裏を横切った。胸が苦しくなる。
　レクシアス…もう１０ヶ月は会ってないわ……。食事は召使がこっそり運んでいるとしても，白い薔薇　は…もっていけない。
見かねたナターリアが急かした。

「レックスが中庭で待ってるよ。コリーンに逢いたいって…いいたいことがあるからって………」

コリーンはハッと顔を上げた。そしてナターリアにキスをすると，

ドレスひるがえして部屋を飛び出した。そして皇女であることを忘れて中庭へ走った。

“早く！早く！貴方に逢いたい！！”

コリーンが息を切らして雪が降る中庭へ出ると，霧でレクシアスの姿が見えなかった。
いくらドレスを着ていても，クリステリアは北欧の国である。コリーンはあまりの寒さに震えた。静寂の闇の中，コリーンはレクシアスの名を呼びながらさまよい歩いた。

寒さに倒れそうになった瞬間，ふいに後ろから抱きしめられた。忘れるわけがなかった。それはレクシアスだった。それは闇の中でもはっきりと分かった。
レクシアスは黙ったまま彼女を城の空き室に連れて行った。中に入ると，レクシアスが薄着にコートをきて，びしょ濡れになっているのが分かった。コリーンは慌ててタオルを彼にあてようとした。だが，レクシアスがそれを制した。

「かまわないんだ。君に逢えるなら。それに一刻も早くいいたい話があった……」

コリーンが手をとめて彼を見つめた。というより，見上げたといったほうが良かった。
彼はとっくに彼女より背が大きくなっていた。彼はすでに１６歳だった。コリーンより一つ下なだけだった。

「なに？？」コリーンがレクシアスの冷たい手をにぎった。
レクシアスのブロンドの髪からしずくが落ちる。レクシアスはコリ

ーンを真剣なまなざしで見つめた。

「冷静にきいてほしいんだ…。二日前，アルセリーナ様が僕の塔へいらっしゃったんだ。たった一人でね」

コリーンはいやな予感がした。

「彼女はこう言った。“お前は私の息子で，実はこの国の皇太子だった。だが女帝制になったいま，お前がコリーンの教育と成長に邪魔だと私は考えた。殺すわけにもいかないから，仕方なくお前には生を許し，この塔に永遠に住んでもらうつもりだった”と……。それから彼女はこう言ったんだよ。いつまでもここにいてはやりきれないだろうから，お前をこの国ではなく，他国で解放すると……」

コリーンは息をのみ，目をみはった。そしてゆっくりと，落胆したように目を落とした。

レクシアスが肩を支えた。「僕はそれをきいてショックだったよ…。愛するキミが，まさか僕の姉だったなんてね。キミは知ってたはずだろう？僕が傷つくと思って，わざと言わなかったんだ。そして，他国にいかなければならない理由も…僕は悟った……」

「すまない……僕が行くことを許してくれないか…？女帝に逆らうつもりは毛頭ないし，僕が君の邪魔になることも知っている。いずれ僕の存在が知れたら，女帝である君の立場が危なくなるかもしれないんだ………」

コリーンは黙ったままそれを聞いていた。そして哀れなその美しい顔は，蒼白で，目は虚ろだった。

紫色の唇を，コリーンはレクシアスに近づけた。レクシアスがそれに答えた。

「君が好きだ……。コリーン。ずっと前から，気になっていた。いつも病気がちな僕に優しく微笑んでくれた。君が微笑むと，視界が明るくなって，世界がとても素晴らしいものに生まれ変わっていったんだ。前にもいったね。この気持ちは変わらないんだ」

コリーンの目から，白い筋がこぼれた。

「どんなに離れていても……どれだけの距離か僕等を分かつとも……。君を忘れない。

そして分からないところで，君の幸せを祈るよ……。愛してる…」

コリーンはほとんど叫ぶようにいった。

「レクシアス…！！私を離さないで！どこにいても，つながれた手を離さないで…！！

私も愛しているわ！好きで好きでたまらない…！！！」

次の瞬間，レクシアスが強く，つぶれてしまうくらいコリーンを抱きしめた。

「やっと君にいえた……心残りはないよ！！」

レクシアスがゆっくりと力を抜いた「もう行かなくちゃ」

コリーンは涙目になりながら微笑んだ。

レクシアスは最後に，コリーンの額に額をあてると，決心したように扉をあけ，飛び出していった…。

取り残されたコリーンはその場に崩れ落ちた。まるでずっと今までためてきた思いがあふれ出すような気持ちだった。

「愛してるのに……なのに……」

第十三話　母との対決

「お母様，知っていらっしゃるのでしょう」

コリーンは自分でも驚くほど冷静な声で言った。

アルセリーナはひどく忙しそうに積まれた書類を座りながら片付けていた。

「何をです」

女帝が不機嫌そうに訊いた。コリーンはじっと前をみすえ，

「黒い森（シュヴァルツヴァルト）にいた塔の少年，いや，青年の事です」

重い沈黙が，女帝の私室で流れた。女帝は黙ったまま，コリーンをゆっくりと見上げた。永遠に続くかと思われたが，女帝が口を開いた。

「………貴女には関係がないわ」

気味悪く睨みつけた後，女帝はペンを動かし始めた。自筆サインの書類が広い机を散らかしている。

コリーンはさっとそれを見回した後，するどい口調で言った。

「関係があるんです。とても，貴女が知らない関……」

「呪わしい関係ね」

コリーンが言い終える前に，女帝が口をはさんだ。

“呪わしい”……。そうなのかもしれない。私達は出逢ってはいけなかったのかもしれない。
けれど，もうこれを誰にもとめることはできない…。たとえ，強大国の支配者でも…。
コリーンは何かとても強い思いが自分を支えてくれていることに気付き，いっそう強く言った。
「そうかもしれません…。けれど，神への冒?を犯したつもりではありません。私達は純粋に…」
「近親愛に，純粋などありますか」
ぴしゃりと，女帝は言い放った。コリーンは深い憤りを覚えていた。拳を固くにぎり，青くなった唇をきっとひきしめ，肩をかすかに震わせた。アルセリーナは薄笑いを浮かべた。
「私はとうに知っているのですよ。プリンセス・アリステッド。貴女がレクシアスのもとへいき，何かよからぬことを企んでいたのは……」
「違う！私達は森で知り合い，そして友情という愛のもとに，私は彼のところへ訪ねていたのです。お母様が想像していたおぞましいこととは全く違うものなのです！」
「黙りなさい！！！」
一瞬で，静かになった。コリーンはまだ何かをいいたげに，口をかすかに動かした。
女帝はするどく彼女を睨みつけていた。

「クリステリアの王位継承者ともあろうものが，偉大なる母の前で暴言を吐くとは……！
こんなにおぞましいことはないわ！！！」

コリーンはほとんど怒鳴っていた。

「お母様は都合が悪くなると，いつもそうよ！王位，王位って！！！誰が望んでそんなものになりたいと思っていらっしゃるの？？！！！」

アルセリーナが立ち上がって，コリーンを力の限り叩いた。
コリーンは何も言わずに，床に倒れこんだ。アルセリーナは顔を真っ赤にして倒れているコリーンを憎悪に燃えながら見下ろしていた。
コリーンは口からでた血を手の甲でふき取ると，負けずにすっと立ち上がり，母の頬をいやというほど叩いた「バシーーーン！！！」
これには，女帝も床に倒れた。散乱した宝石が彼女の下敷きになり，女帝はうめき声を上げた。

「コリーン・アリステッド……！！貴女を許さないわ！！！私がいいと言うまで，北の離宮に閉じ込めてやるわ！！もし，そこでも反抗するのならば，死の監獄へぶちこんでやるから！！！貴女が，レクシアスのことを忘れ，アンドレイ王子につくならば，解放してやるわ」

コリーンは涙で笑いながら，叫んだ。

「やれるものならやってみなさいよ！私だってこんな宮廷とあさらばできて喜ばしいわ！私にレクシアスを忘れさせることなんてできない！」

次の瞬間，女帝がコリーンをまたもぶっ叩き，転がって朦朧とする彼女を兵士につれていかせた。
歩きながら，コリーンは夢を見ていた。

第十四話　北の離宮

ガターン―

扉が閉じる音がして，コリーンはやっと目を開けた。
すりきれた枕の上に，涙のあとがしみていた。「…………………」
扉の方を見ると粗末な籠がおいてあった。そこには紙が置いてあった。
『食事は日に二度です。この籠に全て入れて召使に渡します。足りないだろうから，昼には軽食を用意します。貧民が溢れる我が国で，神に背いた囚人にたくさんの食事は必要ないでしょう』

“囚人”か……。コリーンは力なく微笑んだ。
こうなることは分かっていた。分かっていたはずだ。なのに，なぜ私はわざわざ母のところへ行き，喧嘩をうったのだろう。抑えられない怒りに，身をまかせていた証拠だ。

周りを見渡すと，はがれおちたシックイの壁（それはかすかにグリーンの色だった），天井画には天使が飛び交っている。だが，それも長い年月のうちに，ボロボロになっていた。
そこまで狭くはないが，一人なのにこんな広さはいらなかった。バスルームもついていた。
唯一嬉しかったのは，部屋のすみに置いてあったグランドピアノだった。
コリーンは，転がっていた埃まみれの机を立てると，そこに籠をおいた。
籠の中には少量のパサパサのパンに挟まれたサンドウィッチと野菜

の酢漬けのビンと，冷たいブイヨンスープの入ったビンがあり（それは恐らく朝食だった）夕食用には小さなサラミが2，3本。それにまた
固くなったチキン，かさついたサラダ，それにチーズだった。
軽食はただの果物と白パンだった。飲み物はワインが2本あった。
籠の奥には，また置手紙がありそれといっしょに本が3冊ほど入っていた。
『たとえ囚人だとしても，貴女は君主のための教育をさせます。サボれると思ったら大間違いだわ。
2日に一度，クランベール男爵夫人を呼び，軽い勉強をさせます。ひまだろうから本を三冊入れておきます。二冊はどちらも歴史書です。一冊は聖書。読む本がなくなったらクランベール夫人にいいなさい。私が選びましょう。反省する気があったら，いつでもいいなさい。ちなみに，反抗するようだったら容赦なく死の監獄に入れますからね』
なんだ，結局私なのだわ。コリーンはがっかりした。次女のエリザヴェータが君主になるのかと思っていたのだ。コリーンは二冊を部屋にぶん投げて，聖書を机に置き，チーズをかじり，ワインを少し口に含んだ。生ぬるいワインが喉を通ってゆく。
そしてすぐにベッドに横になった。腹はすかなかった。すいたとしても，コリーンは食べなかったであろう。もちろん反抗である。別に飢えて死んでもいいと，コリーンは思っていた。
その時，窓からカチャリという音がした。コリーンが起き上がると，そこにはナターリアの三つ下の姉妹エレーナが立っていた。エレー

ナは幼いが性格は大人っぽく，聡明であったからナターリアの次にコリーンのお気に入りだった。

「びっくりした」コリーンは目をみはった。「泥棒かと思ったわ」エレーナは悲しそうな顔をした。

「コリーン，なぜ閉じ込められちゃったの。ナターリアが泣き止まないのよ」

ナターリア……。そんなに私を慕っていたのね…。コリーンは胸がしめつけられる思いだった。エレーナは大きな荷物を抱えていた。コリーンが中身を訊いた。

エレーナは微笑んだ。「私もここにすむの」

「なんですって！！！」コリーンは飛び上がった。すぐ帰るようになんとか説き伏せると，エレーナは落胆したように承知した。だがエレーナは言った。

「コリーンがね，辛いと思うからオルゴールと……貴女がスキだったルソーとヴォルテールの本持ってきたわ。それにここにはピアノがあるみたいだから，ハイドン，そしてグルックの楽譜もってきたの」

コリーンは喜びに胸がはち切れるような気持ちになった。大喜びでそれらを受け取ると，エレーナの額にキスをした。

「愛しているわ，小さなプリンセス・エレーナ。本当よ。気遣い有難う。ナターリアにも元気って伝えて頂戴」

エレーナは頷き，それから心配そうにおずおずといった。

「あの……コリーン。食事だけは…頂いてね。絶対に病気になっちゃだめよ」

コリーンは愛想笑いで答えた「ええ，もちろん」

「それじゃ」というと，エレーナは走っていった。

コリーンは窓を閉めると，優雅に立ち上がってハイドンの楽譜を広げ，うきうきしながら引き始めた。視界の中の，世界が輝いた。

＊　　　＊　　　＊

首都カッセントリノのフィンステラウ城から遠く離れた，北の都市セントテールにたたずむクァール・アレクシオン城は，かつて無政府状態だったクリステリアに君臨し，他国との戦争に連勝して，国土（クァール）を膨大なものにして，栄光をもたらしたコリーンの先祖である皇帝アレクシアの名をとってつくられた城である。

北欧であるクリステリアの冬は極寒地獄であり，ことに北の地方は全てが凍り付いてしまう気候であった。クァール・アレクシオン城はこの寒さに対応するように，壁を厚くし窓を小さくするよう作られた。大昔，スートラ8世の母で摂政だった，アグレスト・スー・カルノリア皇太后が引退した後，この城で余生を過ごしたことで有名である。

コリーンは今，ルソーの思想書に読みふけっていた。

その時クランベール男爵夫人が扉を開けて顔を出した。コリーンは不愉快そうな顔をするとすぐにまた本に目を落とした。

クランベール夫人は一枚の手紙を皇女にわたした。
それには『全てに君臨するアルセリーナ・スー・ル・ナルセーシュタノリア』と書かれていた。
コリーンはそれを両手で引き裂くように手紙をあけると，中からはいかにも怒りの込められた字で長々とかかれている紙が出てきた。

『七ヶ月ぶりです。気分はどうかしら。念のために宮廷では貴女の妹アーストル皇女が特別教育を受けています。クランベール夫人から聞きましたが，貴女は日頃からルソー著のフランスを破滅させた本や（ルイ十六世がそう呼んでいる）くだらない思想書を読んでいるそうですね。』

コリーンは一度読むのをやめてから夫人の顔を見上げた。夫人は目をそらしておどおどしていた。

『クリスタリア国の皇女として，祖国を辱めることは許しません。我等はフランスと同盟を結んでいる仲。それを破滅させるような本を読むことは恥ずべき罪です。それに貴女は少しも反省をしないようだから，死の監獄へ移ることも時間の問題でしょう。はやく貴女が祖国のため，母のためにつくしてくれることを望んでいます。』

まだ手紙には何かかいてあったが，コリーンはそれを破き捨てると，またルソーの本を読み出した。クランベール夫人はきっぱりと言った。

「皇女殿下…！今のことも陛下に言いつけてもよろしいのですか？」
コリーンはまるっきりそれには答えず，ただ片手をピアノの鍵盤の上に，そしてもう片方で本を抱えていた。夫人はしびれを切らして

本を取り上げた。

「殿下！！いい加減になさい！貴女は次期女帝の権利を得ているのです。その皇女様がこの有様ですわ！陛下もあきれて仕方が……….」

コリーンは夫人を打った。そして本をつかんでまた読み始めた。夫人は真っ赤になって部屋をでていった。コリーンは全くそれには気にせず，籠からチーズを取り出して食べた。

ここ数ヶ月，彼女はチーズやワインぐらいにしか手をつけなかった。彼女が毒を恐れているのが一目で分かることだった。コリーンは部屋を出て，（離宮は限られた範囲しか入れなかったが）大きな窓からセントテールの町並みを見つめた。

ふいに，カッセントリノが懐かしくなってコリーンは涙を流した。レクシアス……….。今，どこにいるのかしら…。

すると，彼女の足元で小さなスパニエル犬のジェイムズがじゃれていた。

「こらこら，ジミー。イタズラが過ぎないわね。ドレスを汚さないで」

第十五話　薔薇庭の出会い

ある日コリーンはたいくつしのぎに育てていた薔薇庭でねそべっていた。
雲が頭上をゆっくりと通り過ぎてゆく。彼女は瞬きもせずにそれをじっと見つめていた。
ふいに庭の外から声がした。
コリーンはゆっくりと起き上がって目をこすった。
「あの………」
茂みから見つめていたのは１６歳くらいの少年だった。
少年はひどく怯えた目つきでこちらをうかがっている。コリーンは手招きをした。
「だれ？どこからきたの」
少年は黙ったまま彼方にある小さな村を指差した。
コリーンは微笑んだ「エティスバラン村ね。幼い頃度々行ったことがあるわ」
少年はやっと口を開いた。
「皇女アリステッド様ですね…。僕はシャルル・テラスケス。エティスバランの出です。
ここに囚われの姫君がいると聞いて……」
コリーンは沈黙した。だがすぐに顔を上げた。

「…そうよ。でも囚われって言うのは少し違ってるわ。
私は好きでここにいるのだから」
シャルル・テラスケスは笑った。そして庭にそっと入ってきた。
「勝手に見たりしてごめんなさい。僕はある方から伝言を届けにきました」
コリーンは目をみはった。少年は続けた。
「サンテランス伯ブラントからです。
レクシアスという者が先日この国を出たようですが，レクシアスは今ペスタリカ王国にいるとのことです……」
コリーンは頬を朱に染めていった。そして歓びが隠せなかった。
「ほんとう?！レクシアスが！
…そう！で，彼はなんと…?」
シャルルは静かな口調で言った。「そこでの待遇もよく，レクシアスは大変満足しているようです。ですが貴女様がとても心配だと言っていたらしいのです」
コリーンは静かに頷いた。
「私は元気よ。大好きな薔薇に囲まれて幸せだって，彼に伝えてちょうだい」

＊　　＊　　＊

シャルル・テラスケスの突然の伝言はコリーンにとって日々の支え
だった。
シャルルは度々コリーンの薔薇庭に現れては，レクシアスやペスタ
リカ王国の状態や生活を伝えてくれた。それらの情報は極秘として，
ブラント伯爵からシャルルに直接伝えられた。
シャルルとコリーンはたまに庭に座って何時間も話した。
ある日シャルルはブラントの伝言を伝え終えると，じっとコリーン
を見た。
彼は言った。

「皇女殿下，貴女はレクシアス様をどう思っておられるのですか？」

コリーンは微笑んだまま答えなかった。
シャルルは身を乗り出して再び同じことを言った。
コリーンは空を見上げた。そして羽ばたく鳥達に目をこらした。
「ただの友人よ。私のたった一人のお友達。そうね，貴方もそうだ
けど…。
彼は何か違う存在なの。ガラスのようにもろい私をいつも支えて
くれる大切な人」
シャルルは分かったように首を何度も振った。だが少し声をひそめ
て彼女に向き直った。
「ですが…皇女様。私は心配でならないのです。貴女は一人ぼっち

でこの離宮に住んでおられる…。
並みの少女だったら人恋しがって泣きだすに決まっています」
コリーンはハッキリと言った。
「私は生まれた時から孤独と隣り合わせでした。だから1人でここに追いやられても何の苦にもならないのです」
その瞳に光が走った。コリーンは続けた。
「母が……死ぬまで私はずっとここにいるでしょう。そして追放されるかして…。
今すぐにでもいなくなりたいくらいですが…」
シャルルは悲しそうな顔をしてうつむいた。
だがすぐに顔を上げて思い出したように言った。
「…その…陛下のことなのですが…陛下は今体の具合がよくないと聞いております。
これはブラント伯でなく，たまたまブラント伯の館にきていたテルセル公爵夫人が言っていたことなのです。陛下は一日中寝室にいて食事もろくにしないと話していました」
コリーンは何も反応せず，ただ小さく頷いただけだった。
シャルルは彼女を見つめた。
「高貴なるナルセーシュタイン王家の皇女様。貴女はとても素晴らしい方だと，ブラント伯やそのほかの貴族から聞いております。今にこの弱体化しつつあるクリステリアを救う方だと……。彼らは貴方を慕い，貴方を望んでいます。だから，陛下が崩御しても，貴方

にはこの国に留まって欲しいのです」
コリーンは瞳を閉じた。
「私にこの国を救う力も知識もありません。私には無理です」
これには母へのよどみない怒りが込められていた。彼女はこの国が荒廃しつつあるのは紛れもなく女帝アルセリーナの存在だと信じていた。だが，いかに女帝を正当化してもそれは真実だった。
シャルルは立ち上がって彼女に言った。
「貴女がもしこの国を救ってくださるのなら，今すぐにでも貴族達が全力で貴女をサポートします。
決心がついたなら，三日目の夜この薔薇庭に出ていてください。ターフォンヌ伯爵が待っています。そして貴女のダミーをここにおいて，西のペーセッツにある邸へご案内します。そこで陛下崩御の知らせを待つのです……」
コリーンは目を見開いてシャルルを見上げた。シャルルは本気だった。
シャルルは念をおすように強く言った。
「選択の余地は三日です。いいお返事をご期待しております」
するとシャルルは風の如く庭を走り出て行った。
コリーンは呆然とその後姿を見つめていた。

第十六話　決意

シャルルが去ってからちょうど三日目の夜だった。

ターフォンヌ伯爵は約束どおり馬車で暗闇をコリーンの待つアレクシオン城へ向かっていた。

ターフォンヌ伯爵は不安だった。皇女がもしこのことを女帝に密告でもしたら，首を即刻切られてしまう。伯爵だけでなく，少しでもこの脱走に関与したものは死罪になるはずの大仕事だった。

七時半，ターフォンヌ伯爵の馬車は静かに薔薇庭の側で止まった。伯爵は質素な服装をしていた。これは市民達に気付かれないためだった。こんな夜を豪華な馬車と服でうろついていたら，疑われるはずだった。

ターフォンヌ伯爵は急いで庭に入った。そこに人影があった！コリーンだった！コリーンはモスリンの薄いドレスに身を包んでいた。顔を隠すためのショールもかけていた。コリーンは伯爵の腕に飛び込んだ。

「殿下！！！」

コリーンは周りをうかがいながら呟いた。

「行きましょう。伯爵。寒くてたまらないわ」

コリーンと伯爵が馬車に飛び乗ると，馬車はもうスピードで走り出した。

コリーンはホッと一息つきながら伯爵に訊ねた。

「伯爵，私のダミーとはどういうことですか？」

ターフォンヌ伯爵はコリーンに向き直った。

「殿下にそっくりだと評判のクララ・デーンという少女です」

「クララは承知なの？」

「ええ。彼女は殿下のためなら身を投げ出しても良いと言っておりました」

コリーンは俯いた。

「私のために無垢な少女が犠牲になってしまうのですね」

伯爵は慰めた。

「大丈夫です。クララは我々の仲間でなんとかいたします。決して悪いようにはしませんので」

「そう。良かった…」

コリーンはそう言うと，背もたれによっかかって眠り込んだ。

第十七話　崩御

コリーン・アリステッド皇女がクァール・アレクシオン城を脱走してまもなく，フィンステラウ城は女帝アルセリーナの健康状態で大騒ぎだった。

無論，コリーンとその崇拝者の隠れ家，ペーセッツ邸でも女帝の話でもちきりだった。

オルセンシェール伯爵によると，家臣と侍医が囲む豪華なベッドでコリーンの脱走を聞いて，女帝がヒステリーを起こし，病状が悪化したとのことだった。

侍医も，これ以上の回復は不可能とさじを投げた。

国民達は暴君の臨終を望んでいたため，これを聞くと熱狂して喜んだ。国家への誹謗と中傷をしてきた過激的なダルシャン・クラブはこの勢いにのって首都カッセントリノの町を女帝批判の紙を槍に掲げて練り歩いた。

今や，聡明で高貴なる皇女コリーン・アリステッド・スー・ル・ナルセーシュタノリアの登場を皆が待っていた。だが，その次期クァールス（皇帝はクァール，女帝はクァールスと呼ばれた）はと言えば，ペーセッツの個室でずっと引きこもっていた。

1人で，じっと窓の外を見ているのだ。それ以外はいつも聖書や歴史書を読んでいた。

彼女の支援者および崇拝者達は彼女の消極的態度に不満が隠せなかった。女帝の地位が危うい今だからこそ，後継者であるコリーンが猛勉強をして女帝になる準備をするべきだった。

明日にでも女帝崩御と聞いても，きっと誰も驚かない。
それくらい，現実が押し寄せ，ターフォンヌ伯爵が話しても，コリーンは馬耳東風とでもいうように全く聞いていなかった。
「私は，母が汚した祖国をなおす自身がないのです」
コリーンは伯爵にこう呟くだけだった。

＊

＊

「女帝崩御！！！女帝崩御！！！」
町の新聞売りが朝早くから叫び続けていた。
人々は起きはじめ，新聞売りから新聞や情報をひったくった。
やがて彼らは歓声を上げながら町中を行進した。フィンステラウ城ではといえば，次期女帝の会議の真っ最中で誰もが混乱し，呆然としていた。女帝の臨終はあまりに急だった。
政府がそんなものだから，民衆たちの不謹慎な行進（のちに「カッセントリノのパレード」と呼ばれるほどに）を止める軍隊を出すこともできなかった。

もはや軍隊を送っても止められそうもないこの行進は昼頃になると熱狂的なお祭り騒ぎと化し，暴動も起きはじめた。だが，政府はちゃんとした対策をだせずにいた。皇女コリーン支持者と第二皇女エリザヴェータ支持者に，議会は真っ二つになってしまったのだ。

「国家に対し，反逆的な皇女コリーンを女帝になどすべきでない」

「未熟なエリザヴェータ皇女にはいまのクリスタリアを救うことは不可能である」

さまざまな意見が飛び散り，ぶつかり合い，とうとうエリザヴェータ自身からこの件については身をひくとの伝言が届き，国を二つにしかねなかった問題は終結した。そもそもは，故女帝アルセリーナが決定的な遺言を残さなかったのが問題だった。ここでも，故女帝は批判された。

やがてコリーンの身元が分かると（ターフォンヌ伯爵達の脱走計画は完全にスルーされた）重臣達はコリーンを城に呼んだ。コリーンはしぶしぶながらフィンステラウ城に入った。

行く途中でも，コリーンは国民達に支持された。

そして国民達はコリーンに魅了された。「望まれた者」としてコリーンは帰ってきたのだ。

第十八話　戴冠

コリーンは名をコリーン・アリステッド・クァールス・ル・ナルセーシュタノリアと改め，かつて母のものだったドレス，宝石，権力，威厳をもって堂々と戴冠した。

イギリス，アメリカなどの人々は彼女を「メシア・クァールス（救世主たる女帝）」と呼んだ。その美しい容姿からもフランスなどのヨーロッパで「マドンナ・デュース（美しき女神）」と呼んだ。女帝は教養があり，威厳がありそして冷静だった。

女帝の夫ペスタリカ国王アンドレイ・コルヤーヌ・フォン・ハトルスワフは（彼は三週間前に戴冠した）彼女の神々しい姿にまたもや飛びついてきた。
アンドレイはコリーンが監禁されていたとき，抗議しなかったことを詫びた。
コリーンはそれを無視したが，アンドレイはしつこかった。

「すまなかったよ。その時アルセリーナ陛下がすごい剣幕でね。僕は手も足もふさがってたんだ」

幼いエレーナは1人でも私を助けようとしたわ―コリーンは叫ぼうと思ったが，すぐにやめた。
言い争うほどこのクリスタリア女帝に同等の資格をもく者ではないと考えたからだ。

アンドレイはコリーンの気持ちが分かったのか，

「悪かったって……。それは分かってくれよ。僕は今でも君を愛し

ているのだから」

ふざけないで。この男が見せる，女なら僕を許してくれるという愚かな考えがコリーンを苛立たせていた。愛しているといえば，女は許すとでも思っているのだろうか？私は娼婦でもないし，そんなに軽い女ではないわ。

コリーンは重たい声で呟いた。

「そこをおどきなさい。私はまだ仕事があるの。
言い訳は無用です」

アンドレイは怪訝そうな顔つきをすると，サッと身をひいた。いくら強大国ペスタリカ王でも，このクリスタリアの高貴なる女帝の頭上に立つことはできなかった。コリーンは目をつりあげながら彼の前を通り過ぎた。コリーンの夫に対するこの態度にアンドレイ崇拝者たちは喜んだが，宮廷の大臣や重臣達はしびれを切らした。

レンペロー伯爵は何度も女帝を叱責したが（レンペロー伯爵はかつて皇女コリーンの家庭教師だった）コリーンはそれを適当にあしらっていた。

＊　　＊

だが，宮廷人のみならず実は女帝も悩み始めていた。
アンドレイへの態度はどうでもいいとしても，子供がいないのだ。
コリーンはアンドレイへの強固な拒絶を断念して，できるだけおだやかに接するようにした。

後継者問題はいつでも女帝の一番の問題として掲げられた。
民衆はこれに満足はしなかった。聡明な女帝は嬉しいが，後継者のいない不安定な女帝は喜びがたいと。

そんな時，はるか遠くの国スペインからレクシアスの手紙が届いた。
コリーンはそのときだけは皇女のようになって，彼とあたたかい手紙を交わした。

「親愛なるコリーン・クァールスへ。

僕が祖国を離れて1年が立ちます。この一年の間に，あなたはとても変わられたようです。
女帝のあなたは，元皇太子である僕には手も及ばない存在となってしまいました。
どうか，私達の母が成し遂げられなかったことを，民衆が望んでいることを，あなたは叶えてやってください。返事をまっています。

あなたを誰よりも愛するレクシアスより

」

コリーンはすぐにレクシアスに国に戻るよう言ったが，レクシアスはそれを拒んでいた。
彼はもう，コリーンに逢ってはならないと感じていたのだ。
愛を別の愛に変えてはならないことを，彼はすでに痛感していたから。

第十九話　悲恋

コリーンの妹達が次々とあらゆる国へ旅立ってゆく中，やっとコリーンは第一皇女を出産した。
国中が熱狂し，他国も祝った。
コリーンはアンドレイの血をひくこの小さな王女クリスティーナ・アリステッド・ル・ナルセーシュタノリアを，「マダム・クリスティーナ」と呼び，愛情という愛情を注いだ。
１４歳になっていたナターリアは明後日，小国トールスへ旅立つ。未来のトールス王妃はコリーンの腕の中の幼いクリスティーナを寂しそうに見つめた。
「なんて無垢で美しいのかしら」
そう呟くと，クリスティーナの頬に触れた。クリスティーナが微笑んだ。コリーンはナターリアを不思議そうに見つめた。
「あなたもそうじゃない。小さいころとは想像もつかないほど美しくなっているわ」
確かに，彼女は美しかった。１０代のころのコリーンにそっくりの容姿だった。すでに宮廷では有名になっている。ナターリアはクリスティーナからコリーンへ視線を移した。そのもの悲しげな目は多くのことを語っていた。
「私は美しくなんかない。無垢でもない。穢れた女だわ」
そしてゆっくりと俯いた。コリーンは驚いてナターリアを見つめた。

「どうしたの，ナターリア？あなたのどこが穢れているのよ」
ナターリアは答えなかった。コリーンは彼女に触れた。
ナターリアは拒否した。目は涙で溢れていた。
「やめて……私には触らないほうがいいのよ！
私は汚いの！！みんなそう言うわ！どんなに美しくても…！あの人は振り向いてくれない！
それをひきずったまま，私はトールスへ行くのよ！！」
ナターリアは泣き出した。コリーンは目を見開いた。
「……ナターリア，あなた，恋を……！？」
ナターリアは走って，部屋を出て行った。
飾ってあった花瓶が倒れて，ガラスが飛び散った。コリーンは床に落ちたリナリリアを拾い上げた。
「…………私の恋を知ってください…………」
コリーンは呟いた。リナリリアの花言葉だ。
「ナターリア………！！」

＊　＊

翌日，コリーンはナタ—リアが宮廷に帰ってこないので，ナタ—リアと親しいプランツェル公妃の娘，カタリ—ナを訪ねた。カタリ—ナはナタ—リアはいない，と首を振った。

コリーンは首をかしげて言った。

「…あの子，昨日クリスティ—ナを見て泣き出したのよ。「私は穢れてる」って。

そうして，部屋を出て行ったの。夜になっても返ってこないから，私，あなたの家にいるかと思ったんだけど…」

カタリ—ナは不思議そうに言った。

「昨日ですか？昨日は，たしかにナタ—リアは私の家に来ましたよ。「泊まらせてくれ」って。

でも，私が陛下が心配するからって…宮殿に帰そうとしたんです。それで，彼女しぶしぶ帰っていったからてっきり宮殿に戻ったのかと……」

コリ—ンは真っ青になった。

「じゃあ，ナタ—リアは？？？」

カタリ—ナは叫んだ。

「まさか……！！！！」

＊　　＊

ナターリアがいなくなってしまい，宮廷は大騒ぎだった。
明日はいよいよトールスへ行くというのに！！兵という兵が国中を探し回った。コリーンも念のためにトールス国王への手紙を夕方頃，直筆でかいているとき，部屋の扉が乱暴にあけられ，大臣ペーローが叫んだ。

「陛下……！！！」

ナターリア妃殿下が見つかり…ました…！！」

コリーンは立ち上がって冷静に言った。

「どこに？無事だったの？」

ペーローは沈黙した。そして苦しそうに呟いた。

「その……カスティーノ海からご遺体が……うちあげられて…！」

「なんですって！！！！！」

コリーンは叫んだ！

嘘だ！こんなの嘘だ！何かの間違いだ！！！

＊　　＊

ザザーン　　ザザザー　　ザーーーー

ナターリアの変わり果てた姿は，カスティーノ海の海岸で待っていた。
泣きわめく人ごみを抜けて，コリーンは毛布に包まれたナターリアを見た。

青く生き生きと輝いていた瞳は光を失い，ガラス玉のように虚ろだった。
朱に染まっていた頬も，そして美しかった顔も真っ白で，冷たく，氷のようだった。豊かだった金髪も海で抜け落ちたのか，多くが失われていた。その冷たい体も，薄い絹のレースも，びしょ濡れだった。遺体は，夕日に照らされて，一つの死として横たわっていた。

誰かが「自殺だわ」と呟いた。

紫色の唇は，もう美しくも，愛らしくもなかった。
コリーンは毛布をとって大切な妹を抱き上げた。その瞬間，女帝の頬に滝のような涙が流れた。
人々は悲しみに打ち砕かれた。コリーンは半狂乱のまま，愛妹をずっと抱きしめて離そうとしなかった。ナターリアの目は，じっと空を見つめていた。その目に，悲しげに泣きながら飛ぶウミネコの姿

が映った。

海は，無情にも人々を見つめているだけだった。

＊

「ナターリア皇女のご冥福を…」トールス国王からはそう送られてきた。

あの悲惨な出来事は，誰もが悲しんだ。コリーンは三日三晩と，部屋から出ず，食べ物にも手をつけなかった。なぜ，ナターリアが死ななければならなかったのか。あの子が何をしたというのだ。

コリーンは悔しくてならなかった。

自分が気付かなかったから，ナターリアは死んでしまったのだ。

全て自分のせいなのだ。妹１人守れなくて，国を守ることができるのか。

１１歳だったエレーナも，ナターリアの死をきいて一日中泣きわめいた。その強固な悲しみは，誰も受け入れず，暴走した。コリーンが抱きとめてやらなかったら，エレーナは部屋を壊していたかもしれない。エレーナはナターリアを母親代わりにしていたのだ。

エレーナはコリーンに抱きつきながら叫んだ。

「なんでよ！なんで！ナターリアが死ぬの？

神様のイジワル！！！ナターリアを返してよ！！」

エレーナがなお叫び続けても，コリーンはなすすべもなくじっと空（くう）を見つめていた。

第二十話　悲しみの底の真実

コリーンはナターリアが恋していた人物を探し出そうと思った。探し出してからは，その人物をどうするかは考えていなかった。ただ，どうしようもない憎しみがこみ上げてくるのだ。落ち着かない足取りで，部屋中を歩き回っていると，静かに扉が開いた。

そこには，うつむくカタリーナが立っていた。

＊

カタリーナは静かに語った。

「ナターリアに好きな人がいることは誰でも知っていました……。他国へ嫁ぐ前に恋などご法度だということも，本人は知っています。周りはそんな彼女を苛めていたんです。「汚い」って……。けれど，私には手を出すことができなかったんです…。彼らの多くは公爵の子女だったり，伯爵の子女でしたから……。あまりにも高位だったんです。ナターリアは苦しんでいました。日に日に痩せていくのも，心なしか感じていました」

……。

コリーンはナターリアが笑顔を見せないのを，実は感じていた。カタリーナは続けた。

「彼女はある日，私に打ち明けました。その好きな人は，もうすで

にこの宮殿にいないそうなんです。
名前は……確かレックスという方でした。もちろん私はそのような方は知りませんでしたが……」
まさか……！！コリーンは耳を疑った。
まさか彼……レクシアスだったなんて！！ナターリア，あなたは！！
「レックスと言ったのね？確かなのね？」
コリーンは繰り返した。カタリーナはうなずいた「確かです」

＊

それからしばらくして，カタリーナは部屋を出て行った。
コリーンはまだ信じられずにいた。ナターリアは血のつながった兄に恋をしていたのだ。
叶うはずのない恋を……！
コリーンは複雑な気持ちで，座り込んだ。

第二十一話　揺れる心

コリーンはいつもの煌びやかで豪華な衣装をやめ，喪に服した。
そして，震える指でレクシアスに手紙を書いた。大きな私室はロウソクだけを灯し，空気は女帝の心のように沈んでいた。書きながら，コリーンは大粒の涙を溢してしまった。

『　親愛なるレクシアスへ

私の可愛い妹のナターリアが先日，亡くなりました。
私の悲しみは海の底のように深くて，とても彼女の死因をかくことができないことを，お許し下さい。
お兄様，どうかナターリアのために祈っていただきたいのです。
彼女は若くして死んでしまったのです。幸せを何も知らないまま，一人で逝ってしまった…。
だからこそ，あの世で彼女の永遠の幸福を約束したいのです。ですが，私の祈りでは限界があります

ここで，筆は止まってしまった。コリーンはハンカチで涙を拭った。頭が混乱してて，どうしても次の言葉が浮かばなかった。

その時，部屋の扉が開いた。

コリーンが振り返ると，ネグリジェを着たエレーナが青い顔で立っていた。美しかった金髪はナターリアを失った悲しみのために，多くが抜けていた。まるで死んでしまったナターリアにそっくりになってしまっているエレーナを見て，コリーンは戦慄を覚えた。

「エレーナ，どうしたの？眠れないの？」

コリーンが優しく尋ねると，皇女は力なく首を振った。女帝はゆっくりと立ち上がると，扉まで歩いていき，しゃがんでエレーナを抱きしめた。その体の細さに，コリーンは驚いた。弱々しい骨が，突き出ている。ヒカリを失ったエレーナの目を見つめ，コリーンは声を上げた。

「エレーナ……！何も食べてないのね！？」

皇女は答えなかった。唇を閉じたまま，じっとコリーンを見下ろしているだけだった。

コリーンは急いで女官を呼び，エレーナに食事をさせなさいと命令した。女官がエレーナの小さな手を取ると，エレーナは反抗した。体が弱った少女の力とは思えないほど，その力は強かった。

「やめて……！やめて………！触らないで」

「言うことを聞きなさい！エレーナ！食べないでどうするの！！」

声はひどくかすれていた。コリーンは暴れるエレーナを抑えた。

エレーナは目に涙を浮かべて金切り声を上げた。

「やめてよ！！食べ物なんかいらない！
ナターリアがいないのに，食べ物なんかおいしくない！」

「エレーナ！！！」

「いやよ！いやよ！！コリーンなんか嫌いよ！コリーンのせいでナ

ターリアは死んだんだわ！　コリーンが自分勝手なせいでナターリアは死んだのよ！！　可哀想なナターリア！　死んでも，あたししか悲しんでもらえない！！」

コリーンは泣き喚く妹に思わず手を上げた。

激しい音がして，弱ったエレーナは床に倒れてしまった。女官が慌ててエレーナを助け起こすと，コリーンは我に返った。目の前には，憎悪に満ちた顔のエレーナがよろめきながら立っていた。

「あ……今，私……」コリーンは赤くなっている自分の手のひらと，赤くなっているエレーナの頬を見た。エレーナは大きな声でコリーンを罵ると，走って行ってしまった。女官はどうしてよいかわからず，おどおどしている。コリーンは呆然とたちつくしていた。

＊　　　＊　　　＊

「陛下，エレーナ皇女殿下が，私室から出てこられません」

養育係長のブラッセル伯爵夫人が女帝に言った。

女帝は黙ったままそれを聞いた。そして，静かに答えた。

「ほうっておきなさい」

伯爵夫人は訴えた。「ですが，陛下。妃殿下はここ一週間ずっと何も口にしていませんわ。飢え死にしてしまいます！」

コルニース大公国の大使エスパリヤがそれに加えた。

「そうですぞ。女帝よ。エレーナ皇女の嫁ぎ先は我が国のフロペリヤ大公なのですぞ」

「大丈夫です。コルニース大使よ。エレーナは死にませんわ。私が保証します」

「ですが，万が一今，私室で倒れていたらどうする」

「起き上がらせます」

女帝はきっぱりと言った。そして近くにいたペニョン公妃に耳打ちした。

「エレーナの私室へ案内して」

第二十二話　強固な拒絶

「来ないで」

中からは拒否するエレーナの声が響いてきた。「入ったら死んでやるわ。ナターリアのところへ行くの。みんな悲しませてやる」

一同は皇女の脅しに震え上がったが、コリーンは毅然とした態度でドアごしでエレーナに対抗した。

「やってみなさい。貴女にはできないわ」

返ってくるのは沈黙だった。長い沈黙の末、エレーナとは思えない低い声が聞こえた。

「コリーンに何が言えるの。私の何も知らないくせに」

あの素直で可憐だった少女の言葉とは大違いだった。エレーナは一度もコリーンに反抗することはなかったのだ。ただの一度も。コリーンは何か冷たく痛いものを感じて、声が震えた。

「知ってるわ……」

その言葉には弱々しい響きがあった。すぐにエレーナの勝ち誇ったような声が上がった。

「あなたはずっと私のことを知っているふりをしていたのよ。女帝になってから、あなたは私のことなんか無視してたわ。ドレスが小さくなっていたのをあなたは気付いてたの？私が女官にいっても、

あなたは「忙しい」といって聞いてくれなかったわ」
「ナターリアも疎外感をいつも味わっていたわ。私と同じように。なのに彼女はあなたを理解して我慢してたの」
“ドレスが小さい”
はるか昔、エレーナと同じくらいだった頃、私も母にその言葉を言っていた。
気付いてるのか、気付いてないのかわからないような態度をとる母を、私は憎悪していた。あんな女を母だとは思いたくなかった。なのに、私はあの女と同じ態度をナターリアやエレーナにしていたのだろうか…
「何もいえないでしょう。真実だもの。ナターリアは孤独の中でさんざん苦しんだあげく、死んでしまったのよ。１人きりでね」
エレーナの言葉が、心に深く突き刺さった。頭の中が真っ白になった。何歳も年下のはずのエレーナが、恐ろしくてならなかった。周りの者はただ呆然として立っていた。コリーンはその場にいられなくなり、考えるより先に走り出していた。
“みんな私のせい”コリーンは後悔で胸がいっぱいになりながらも、涙が止まらなかった。

第二十三話　広がる波紋

コリーンは私室に飛び込んで、ベッドにしがみつくなり大声を上げて泣きはじめた。
今までこらえていたものが一気にあふれ出すように、コリーンの涙は止まらなかった。

罪悪、屈辱、無責任、孤独、虚無………

さまざまな言葉が交差する中、コリーンはただ後悔するばかりであった。

ナターリアの苦しみも、エレーナの苦しみも、自分の苦しみも……
結局は自分自身でつくりあげていたのかもしれない。仕方ない、仕方ないと繰り返して自分の感情を押し殺して皇女たちの苦しみも知らぬまま、さまざまな国に嫁がせて…。恋をしていた妹たちもいただろうに……。

一体、私は何をしていたんだろう。

そう思うとやはり胸がしめつけられて、涙があふれてくるだけだった。

「レクシアス…私、どうすればいいの？」

祈りの言葉のように呟いた声は、泣き声の中に消えていった。

消えていく、うすれていく…あなたの面影…

「レク…シ…アス！！！」

「結局母と同じになってしまった」コリーンは叫んだ。

第二十四話　再会のレクシアス

三日後、とうとう弱りきったエレーナ皇女を臣下たちが扉をこわして部屋から運び出し、なんとかことなきを得たが、今度は女帝が部屋に引きこもってしまい宮廷中が大騒ぎだった。

どんなに仲が良かった友人も、身内の貴族達も（もちろんアンドレイも）相手にされず、コリーンは嘆くばかりであった。こんなことをしていてはいけない、と分かってはいるのにあふれる感情をおさえることができず、彼女はナターリアの死とエレーナの憎悪の間でもがき続けていた。無力な自分をどう励まし、奮い立たせてやれば良いのか分からなかった。

彼女の古き友人達は、ある日レクシアスの居所をつきとめ、彼にクリスタリアにきてもらえるよう頼んだ。最初はとまどったレクシアスだったが、やがて彼がスペインを立ったとの情報が友人等にもたらされ、彼らは狂喜した。だが、レクシアスさえもコリーンが拒んでしまったら、もう今度こそどうにもならないと覚悟もしていた。
皇女クリスティーナは仕方なく乳母に育てられることになった。
コリーンは愛する子にさえも興味を示さなくなっていた。
レクシアスの到着をまつ間、国の中で再び国家不信をとなえる者たちがあらわれ、内政だけでなく国の雰囲気さえも乱れていた。

そんなある日、とうとうレクシアスが馬車にのって入城した。
それは極秘として早朝のうちにされた。レクシアスは入城してすぐ、コリーンの私室へ走っていった。貴族の取り巻きは一人もつれていなかった。彼はコリーンと二人だけになりたかったのだ。

「コリーン……？」彼は扉に向かって優しく語りかけた。
しばらくすると、中からかぼそい声が返ってきた。「……レクシアス…なの？」
美しいソプラノの声。レクシアスは感嘆に胸が震えたが、冷静に応えた。
「そうだよ。入ってもいい？」
数分返事がなかったが、やがて扉をあける音がし「どうぞ」とコリーンの声がした。

レクシアスがなかにはいると、そこには髪が乱れ、目が腫れ、急速に衰えた女帝がベッドに横たわっていた。すでに枕には大量の涙がしみついており、びしょびしょだった。だが、彼女は何も気にしていないようだった。「コリーン」
レクシアスはゆっくりとコリーンに近づき、骨が折れそうになるくらいきつく彼女を抱きしめた。
「帰ってきたよ…。僕だよ」
「…レクシアスなのね…？」ほとんど涙声でコリーンがつぶやくと、レクシアスは涙を流しながら微笑み、彼女のひたいにキスをした。
すると、みるみるうちに女帝の頬に赤みがさし、目に生気が戻ってきた。
「どうしたんだい？君らしくないな、コリーン。まさかナターリアの死をまだ悼んでるのかい？」
いいえ、とコリーンは首を振った。
「自分の死を悼んでるの」
「自分の死？」レクシアスはききかえした。
「…女帝としての私よ…。もう私は女帝としての威厳も、振る舞いも忘れてしまったの…」
「私は、何もできないの」彼女は繰り返し、それからガックリと首をうなだれた。

二人のあいだにしばらく沈黙がただよい、時間が止まったように音がなかった。
レクシアスはじっと紺碧にかわってしまったコリーンの目を見つめ、それから優しく微笑み、彼女の白い手をにぎった。
「何いってるんだよ…。コリーン。僕は…自信がなくて弱々しいコリーンなんか見たくないんだよ」
コリーンはピクッと肩を動かし、顔を上げたが、すぐに苦しそうな顔になって声を上げた。
「ごめんなさい…！でも私もう限界よ…。好きでもない人の相手して、あれしろこれしろってしつこい重臣達の要望をきいて、国民の誹謗に耐えて…」
「妹の死と私に対する憎悪に耐えなければならないの」
彼女は涙を流して瞳を揺らした。そこには強い悲しみが浮かんでいた。
「ねえ、どうすればいいの？私どうしたらこの国を治められるの？ねえ、どうしたらナターリアは…！」
「やめろ！！」
レクシアスが叫び、そして再び彼女を抱擁した。彼のぬくもりは、冷たい彼女の体にすぐに伝わり、コリーンは力が抜けるのを感じた。

第二十五話　決意のぬくもり

「僕はもう君から離れないよ！もう君を一人にはさせない。もう二度と」

そう叫ぶ愛しい弟の声はひどくしゃがれていた。
コリーンは自分の熱い涙が弟の体につたりおちるのを感じたが、どうしても涙をとめることができなかった。彼は自分に泣いてほしくないと願っているのに……！

「コリーン。君を愛してる。家族愛でも兄弟愛でもない！もっと深い愛なんだ。君が笑ってくれるのなら僕はなんだってするから…！だから、もう苦しまないで！」

コリーンは弟の愛を聞きながら、濡れた瞳を閉じた。

ああ…これはもっとも私が求めていたもの…。心の裏でひた隠ししていた思い…！

「…レクシアス。どうかここにいてね。片時もはなれないで…」

そう彼女が告げたとき、コリーンの体中から力が抜けた。
レクシアスは彼女の額にキスをする。

コリーンは安心とぬくもりに抱かれて眠っていた。

＊

「陛下。エレーナ皇女が陛下をお呼びです」フルツスーシ大臣がそう告げると、コリーンはにこやかな笑みをうかべてレクシアスの手をとり、エレーナの部屋へ向かった。

明日、いよいよエレーナはコルニース大公国へ旅立つ。
コリーンとレクシアスは幸せだった。レクシアスが訪れた日から、コリーンの人生には希望という光がさしたようだった。あれから二年。エレーナとも話をし、今では世界で最も仲の良い姉妹といわれるようにもなったのだ。エレーナは１３歳で、嫁ぎ先のコルニース大公の子息と恋に落ちていた。そしてコリーンとレクシアスも、決して不自然でないように愛し合っていた。
完璧なレクシアスと、優美できらびやかなコリーンの姿はギリシャ神話の神々のようだと湛えられ、さまざまな国から賞賛を浴びていた。

「コリーン！！レクシアス！明日このドレスを着ようと思うの。どうかしら？」

エレーナが無邪気に笑いながら二人を迎え、バラ色のドレスをキラキラさせながらくるりと一回転してみせた。レクシアスは微笑んだ。
「似合ってるよ。でも花嫁衣裳をきたらもっときれいだろうな」
エレーナは恥ずかしそうに小さく笑い、それから探るような目つきでコリーンを見た。
コリーンは黙ったままエレーナを優しく抱いた。

「きれいよ。エレーナ。まるで天使のようだわ」

「ほんとう？」エレーナは目を輝かせた。

そのとき、部屋の扉が開いて召使のアンナが二歳になったクリスティーナを抱いて現れた。
エレーナは歓喜の声を上げた。「あ！きたのね。クリスティーナ！」
アンナはコリーンに向かって微笑を投げ、それからゆっくりとお辞儀した。
「エレーナ皇女様がドレスをぜひクリスティーナ様にお見せしたいと言っておりましたので」
「いい考えだわ！ほら、クリスティーナはあなたを見て目を見張ってる」
コリーンは明るい笑い声を上げ、それからクリスティーナのカールした金髪を指にからめた。クリスティーナは美しくなったエレーナにじっと見入っており、母親さえも気付かないようだった。レクシアスが笑った。
「どうだい！僕の妹は誇らしいよ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6826l/

白い薔薇が咲く頃は

2010年12月9日21時23分発行